
スパゲティーナポリタン

かきかたえんぴつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペゲティーナポリタン

【著者名】

Z4984Z

【作者名】 かきかたえんぴつ

【あらすじ】

家に帰りたくなくて、このところ道草食っていた男の子が懐かしい匂いに出会う物語。

この作品は、別のサイトにも投稿する予定です。

(前書き)

日常もの、非は付きません。
本文には書いていませんが、設定では主人公は高一です。

懐かしい匂い、好きですか？

雨が降っていた。人々は傘を差し、道をすれ違う人は皆いそいそと家路をたどっていた。

いまは夕暮れ、じきに日も地平線へと吸い込まれていく。子供達が遠くの方からこちらへ駆けてきた。親に頭はぬらすなど言われているのか、それぞれ思い思いの物を頭にのせていた。頭にのせたランドセルで前が見えなかつたのだろうか、うちの1人が僕にぶつかってきた。

「あつ、ごめんお兄ちゃん。だいじょぶ？」

坊主の男の子は、本当に心配そうに僕を見上げていた。

「ああ、僕は大丈夫。君、ケガは？ぶつかって悪かつたな」

「ううん、ちがうよ。謝るのはボクだよ。ぶつかってごめんね」

僕が早く行きなといつてやると、男の子は自分の仲間達を追いかけてザーと降る雨の中をまた駆けだしていった。

はあ、寒い。学校帰り、傘を持つていなかつた僕はあつという間にずぶ濡れになつてしまつた。身体の芯まで雨水が染み込んで凍えるように寒い。

早く家に帰ればいいのだが、今日はもう少し外にいたかった。今のウチは少し居づらいのだ。

最近、母親が再婚した。相手は母と同じくらい年のいったおじさんで、人当たりの良い穏やかな性格の人だ。

別にそういう人は嫌いじゃない。ただ、夜家に帰ると知らない男が - 家族とはいえ、あまり交流をもつていなかつた人が、毎晩僕らと同じ食卓を囲んでいることに不快感を覚えるのだ。

もうこればかりはどうしようもない。一応、馴れようと努めてはいるが、新しい父の前だとどうしてもぎこちなくなつてしまつ。

もうこのところ、家にいる時間を作らなくなつた。

最近僕の帰りが遅くなつたと母は小言を言つてくるよつこなつた。

母の言葉がチクチク痛くて、わらひに家に居づらくなつた。

僕は今、店のほとんどがシャッターを降ろした商店街を歩いてゐる。なぜだかここはとても落ち着く。何といふか居心地が良くて、僕の放課後の道草スポットだ。

経費削減のためアーケードには明かりが灯つていない。足元を照らしてくれるのは数軒飛び飛びで漏れ出る店の明かりだけだ。ときおり店の中から声をかけてくれる老人たちも、今日のような口は客も来ないと踏んでかそれぞれカウンターの奥の居間に引っ込んで出でこない。

僕は歩き続けた。目的地があるわけでもない、ただぼつぼつとタイルに響く自分の足音を聞きながら歩くと気分が落ち着いた。だから歩いてみる、疲れるまで、ずっと。

そのうち商店街の外れについた。そこから先は住宅街だ。いつもはそこでもと来た道を引き返すのだが、今日は気分が乗らなかつた。もう少し先に行つてみたい。もしかしたら何か面白いものがあるかもしれない。

少しの躊躇はあったが、ここまで来たのだからとそのまま歩を進める。立ち止まることはない、ただひたすら歩き続けた。

ある家の前に差し掛かったとき、僕は突然歩を止めていた。無意識のうちだったので自分が立ち止まつてゐ事にさえ気づくのが遅れた。

なぜだらう、僕はこの家に強く惹きつけられた。古い建て売り二階建て、決して形やデザインに惹かれたのではない、単にいい匂いがしたのだ。昔自分の家でも嗅いだ事のあるいい匂い。

それはトマトケチャップのやさしい匂い、ほんのりウインナーの

香ばしい香りも混じつていて。大きく息を吸うと口の中までふんわりとしたケチャップで満たされていく。スパゲティーナポリタンだ。

「ああ、いい匂い……」

そうつぶやいている自分に気づいた。まだパスタなんて言葉も広まっていなかつた頃のスパゲティの匂い。

なんだか懐かしかつた。温かかつた。少しだけ、帰りたいと思つた。

家の周りを一周してみた。他の通行人からすれば僕は変質者だ。でも構わない、とにかく家の中を覗いてみたい。スパゲティー、覗いてみたい。

あつた。申し訳程度の庭に、人が出入りできる大きな窓がある。僕は思わず庭の垣根に頭を突っ込んで覗いていた。そこには、当然だけど家族があつた。母と息子の二人だけ。息子は両手にフォークとスプーンを握りしめて、台所で忙しそうに動いてる母の背中を、もう我慢できないというように食卓から見つめていい。見ている僕も、いつの間にか口の中が唾で一杯になつていた。

しばらくして、息子の顔に見覚えがある事に気づいた。ああそうだ、さつき道でぶつかつた男の子だ。

顔を思い出してはつとなつたとき、窓の内の男の子が待つてましたとばかりに歓声を上げた。料理が運ばれてきたようだ。母親は小盛のスペゲティのつた浅めの皿を男の子の前に、大人用の大きめの皿を自分の座る椅子の前に、そして一番の特盛をのせた皿を空いているもう一つの席の前に、空いている席は一体誰のだろう。ああそうか、父親か。でも食卓に皿を並べているつて事はもづじき帰つてくるのか。

そこまで考えていたとき、背中から声をかけられた。

「おい、あんた誰だい」

突然声をかけられて、僕はビクンと動いてそれきり身動きが取れ

なくなってしまった。どうしよう、動けない。顔見られたくない。

「ここは俺の家なんだ。用があるなら玄関から… おお、いい匂いだ。

今日はスペゲティか

「どうやら男の子の父親らしい。その人もやっぱりスペゲティに歓声を上げてる… いやだからそんなこと言つてる場合じゃない。この状況をどうにかしなくちゃ、父親にお巡りさん呼ばれて突き出されではしゃれにならない。

「まあいいから、とりあえずそこから頭引っこ抜いて」

父親は、学ランの後えりをつかむと僕を力任せに「引っこ抜いた」

。

どうと床にへたり込む僕を見て、父親はうん?と眉を潜める。

「やっぱりびしょ濡れじゃねえか。うん? しかしあ前……」

やばい、警察呼ばれると思い立ち上がりとした僕に、父親はわけのわからない言葉を投げかけた。

「夕飯、食つてくれ?」

「…………は?」

思わず声に出してしまった。わけが分からぬ、どうじてそういうふる。

「いやだって、不良でも無さそつなのにこんな夕飯時に一人でうろちょろしてるガキつつたら、オウチの人とか家に居ないのかと思つてな。なんならウチで晩飯食わせてやつてもいいんだが、どうする?」

まさかこう来るのは思わなかつた。正直嬉しい、だけど

「……いいえ、結構です。ウチにはちゃんと母がまつてます。今日は少し… 寄り道していただけです。心配かけてすみません」

僕が軽く頭を下げるが、父親は少し困つた顔をした。

「いや、俺に謝るなつて。心配かけてるのはあなたの母ちゃんの方だ。早く家に帰りなさい」

そう言い残すと、父親は家の玄関の鍵を開けて入つていった。僕はそこに佇んで、しばらくすると携帯を取り出して電源を入れた。

真っ黒だった液晶が一瞬白く光ると、それきりうんともすんとも言わなくなってしまった。完璧に水没してしまったようだ。

公衆電話を歩いてさがすと、ガラス張りの箱はすぐに見つかった。十円硬貨を何枚か突っ込んで母の携帯のへかける。母は三回田のコールででた。

「はい、もしもし？」

「ああ、母さん。おれ…だけど」

「ん？ ああ、あんた。お前ケータイじゃないのかい？ どこからかけてるの？」

「それが…携帯壊しちゃって」

「つたく、あんつたは…はあ、それは家に帰つてから呟るわ。それより、あんた夕飯は？」

「うんそれなんだけど、ちょっと食べたいのがあって……」

「ざんねん、もう作っちゃったわよ。今夜はカレーだから、それはまた今度ね。それと、あんたもういい加減帰つてきなさい」

「うん、もう帰るよ。今日はちょっと寒いから」

「分かつたわ、カレー温めとくから」

「うん分かつた。じゃあ」

ガチヤン

カレーかあ、カレーもいいな。

電話ボックスから出ると、雨は小降りになつていた。

ところどころ雲がちぎれて、そこに夕日の最後のひと欠片が反射して淡いピンクに染まつてゐる。

財布を手提げカバンにしまつと、自分の家とへと足を向けた。今日はいつも違つて歩調は軽い。

久しぶりだな、帰るのが楽しみだなんて。

鞄を胸に抱きかかえると、僕はサーと降る小雨の中を駆け出した。

早く帰らなきゃ。

- f
i
n
-

(後書き)

朝家を出ると家の隣からする味噌汁の匂いや、帰宅する時に漂つ
カレーの匂いつて、たまにそこですと嗅いでいたくなったりす
は自分でしょつか?

たまに食べてくなつてしまつ懐かしい料理はあなたにありますか?

下手な文章ですが、最後まで読んでいただけると幸いです。
書き方についてなにかご指摘がありましたらビシバシ書いてくだ
くると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4984z/>

スパゲティーナポリタン

2011年12月16日22時52分発行